

年次報告書
(ホームページ掲載版)

2022 年度活動報告
2023 年度活動計画



2023 年 7 月

特定非営利活動法人
サハルの森

〈目次〉

はじめに	1
2022 年度現地活動報告	3
2023 年度現地活動計画（2023 年 1 月～12 月）	10
国内活動－2022 年度活動報告・2023 年度活動計画	12
監査報告書	17
運営委員・監事名簿（2023～2024 年）	18

〈表紙の写真〉

アルファブグーの保護林を訪れた、マリ国環境省・
環境持続的開発機構（AEDD）のジャッロ氏と会談

〈裏表紙の写真〉

配布苗を手にして喜ぶ女性たち

2022 年は、治安悪化の影響でしばらく途絶えていた日本人スタッフの派遣を再開することができました。ファナに日本人が入ることはかないませんでしたが、現地スタッフの活動状況など機関誌で報告してもらったように、充実したものでした。

これまでも、現地スタッフの協力で実践者への支援と新実践者の選抜などを進めてきました。苗木や植林に興味を持つ人が増えることは、サヘルの森としてもうれしいことです。その先の、実践者が周囲の村人に与える影響についても期待しているところです。

実践者に期待すること

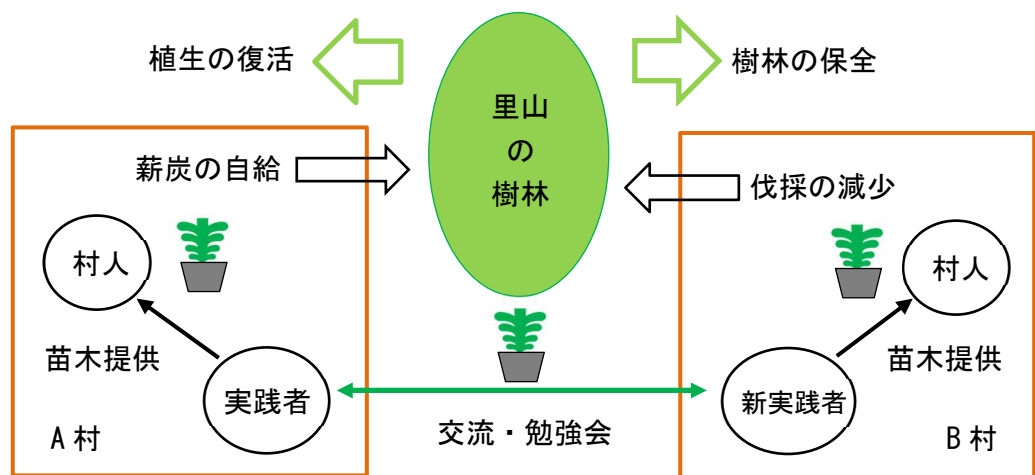
実践者は、サヘルの森の他にも先輩にあたる地域苗畑（主）とも協力しながら苗木を育て、植林をしていきます。新実践者は、実践者の苗木が立派に育つ成功例を見て、自身も参加したいと申し出てきました。地域苗畑主も実践者も新実践者も、それぞれは単なる村人ですが、役人や NGO 関係者ではなく、普通の村人であるという点が重要だと考えます。

村人の生活の中に実践者という苗木を作る人が入ってきたことで、特別な行事やイベントとしてではなく苗木を手に入れたり畑に植林するということが可能となります。さらに、自分で植えた木から薪をとるようになれば、村の周囲の自然植生の保全につながります。

保護林を中心とした里山再生

機関誌サヘル 110 号の報告記事に、村長が村の林を保護林として守っているアルファブグー村の事例が紹介されています。19 年間の保護活動により、今では周囲の林が薪として切られた中でも自然植生を保っています。さらにサヘルの森の協力で、村長の息子が新実践者として苗畑を開設することになりました。

こうした保護林のようなまとまった樹林を持つ地域での実践者の活動は、極めて重要だと考えます。保護林を中心に、周囲に苗畑や植林地の緑が広がることで、将来的にはひとかたまりの大きな樹林を形成する可能性が高くなるからです。

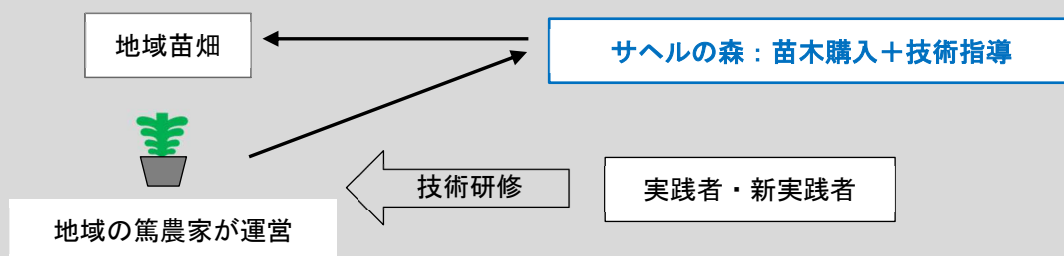


実践者を中心とした里山再生プラン

サヘルの森の現地活動を理解する手助けとして、いくつかのキーワードを用いて解説したいと思います。「地域苗畑」「実践者」「学校林」いずれも機関誌等でよく目にする言葉です。

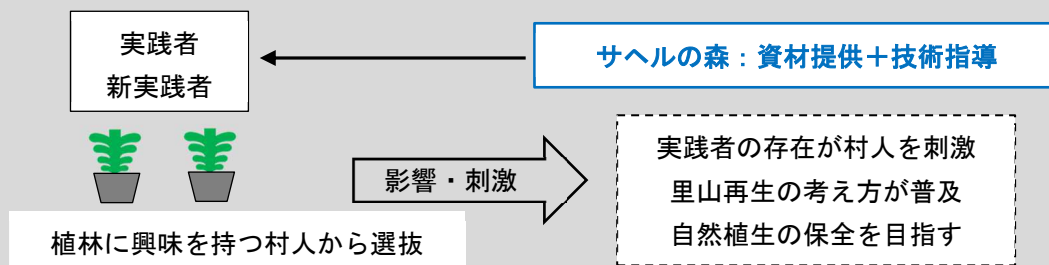
キーワード その1「地域苗畑」

マリは砂漠の国という印象が強いですが、ファナ地域などでは農業も盛んに行われています。中でも自ら苗木を育て自給用や商売にしている篤農家を「地域苗畑主」と呼び、コンタクトをとってきました。サヘルの森は、「地域苗畑」から苗木を買うことで、育苗・植林へのやる気を後押し、同時に「実践者」への技術伝達の役割も果たしてもらっています。



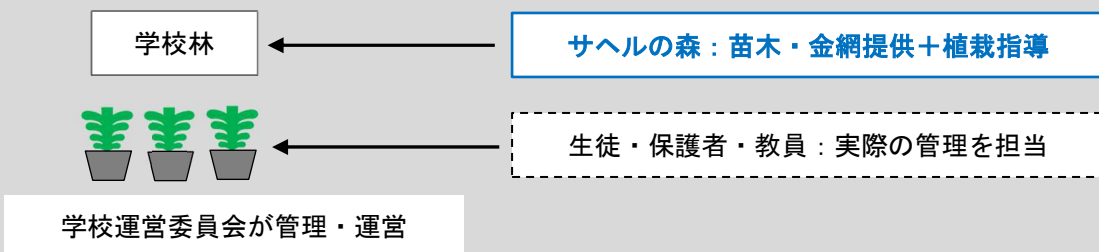
キーワード その2「実践者」「新実践者」

サヘルの森が村人の中からピックアップした、植林活動を積極的に進めたいと思う人たちが「実践者」です。「実践者」の活動を見て、自身も参加したいと加わった人が「新実践者」になります。苗木を育てる人や植えた木を売る人が身近にすることで、村人の間にも林業や里山再生の考え方が普及し易くなります。将来的な自然植生の保全を目指しています。



キーワード その3「学校林」

前号機関誌でもお知らせしたように、ファナ地区での学校林の育成についても協力を行っています。学校運営委員会から協力の申し出があった学校に対して、サヘルの森は苗木と金網を提供、植栽の際の現地指導などを行っています。苗木を植えた後の管理は、学校運営委員会の元、生徒・保護者・教員などが取り組んでいます。



2022 年度現地活動報告

2022 年は、相次ぐ新型コロナウイルスの変異株の出現により世界的な感染が継続したものの、ワクチン接種が進んだこともあり、世界はアフターコロナに向け徐々にコロナ前の日常を取り戻していきました。マリにおいても、昨年 5 月からワクチン接種が始まり、全人口の 1 割程度の接種率とはいえ、マリ国内の感染者累計は 32,772 人、死者累計 743 人（2023 年 1 月末現在）にとどまり、心配された医療崩壊もなく落ち着いています。

2020 年 8 月、2021 年 5 月に 2 度目のクーデタを経験し、西アフリカ諸国経済共同体（ECOWAS）から一時的に経済制裁を受けるなど政治的な混乱が続いていましたが、暫定政府が 2024 年 2 月に大統領選を行う民政移行へのロードマップが示せたことで、経済制裁は解かれ一旦は落ち着きました。一方で、暫定政府との関係悪化により 2022 年 8 月にフランス軍が完全撤退し、暫定政府はロシアのワグネル（民間の軍事機関）との関係を強化するなど不安定要因は残り、これに呼応するかのように、マリ国内で武装グループによる治安当局に対する襲撃事件が多発しています。マリ国内情勢は厳しい状況が続きますが、今後も治安状況に留意したうえで、比較的安全なマリ南部での活動を進めていきます。

2022 年度のマリでの現地活動は、マリ南部のファナ地域に絞って行いました。また、約 3 年ぶりに日本人を派遣（6～8 月）でしたが、滞在時の治安悪化により現場訪問は見合わせ、マリ人スタッフを現場に派遣して活動を進めました。雨期前（3～5 月）より植樹の準備（育苗、柵設置、植穴掘り）を行い、新実践者候補者へ苗木を供与し植栽しました。雨期（5～9 月）に入り、苗木配布や学校林の育成、里山再生の実践などを行いました。乾期（1～5 月、10～12 月）には試験地への石組設置・在来樹の直播、配布苗の生育状況の確認、学校林の保護柵補修、実践者・新実践者間の交流、新実践者の選抜・苗畑設置などを行いました。

①里山再生の新実践者への拡大

これまで、地域の中でも高い技術を持つ地域苗畑主のもとで研修を行い、自身の里山で育苗し、植え育て、使うまでを自身で行う「実践者」を育ててきました。彼らはそれぞれの地域で里山再生を実践していますが、まだ点でしかありません。里山の荒廃が加速する中、さらに里山再生を推し進めるためにも、彼らの周りで興味を持つ人たちを「新実践者」として拾い上げ、実践者と同じように自身で育苗し、植え育て、使うまでできるように育て、面としての広がりを持たせていきたいと考えています。



里山再生を実践する村人たち

実践者：2015 年～2018 年の 4 年間、育苗や樹木育成の高い技術を持つ地域苗畑において研修し、自身の里山で、育苗、植栽、育成、利用までを自身で行う村人。4～7 年の里山再生の経験と知識を蓄積してきた。それを周囲の村人たちに共有してもらい、里山再生の輪を広げる先駆者として育てもらう。

新実践者：2021 年から、実践者の同村または周辺村で木を育てることに興味を示し、実践者同様に育苗・植栽・育成・利用まで自身で行えるようする村人。実践者同様、地域に技術や経験を共有できるようにしていく。

(1) 新実践者候補の開拓と苗木配布

2022 年も新実践者の候補者を開拓しながら、広く村人に植え育ててもらうために苗木配布を進めました。ファナ地域において実践者・新実践者の村々とその周辺の 16 ヵ所、計 8,630 本の苗木を配布しました。2022 年は実践者、新実践者の苗畑も充実し、彼らから購入した苗木は配布苗の 6 割以上になりました。



表 1 購入先苗畑

地域	苗畑名
バマコ (1 ヵ所)	サンガレブグー
ファナ (12 ヵ所)	ファナ 2、ファナ 3、タンバブグー、フガニ (以上、地域苗畑)、カソマブグー 1、ジェバ 1、ジェバ 2、グンドゥ 1、グンドゥ 2 (以上、実践者)、カソマブグー 3、ウルフィエナ 1、アルファブグー (以上、新実践者)

ユーカリと在来種

マリで植林と言えばユーカリとなり、サヘルの森でも配布する苗木の多くはユーカリです。苗木が入手しやすく、生長が速く、材もまっすぐで様々な用途に利用でき、市場で取り引きされるからです。しかし里山の多様性を考えると多くの有用な在来種の育成も考えなくてはなりません。

以前からカイセドラ (木材として利用される在来種) は地域苗畑でも育苗され、サヘルの森でも配布苗や植栽に使っていますが、生育は遅く、苗の価格はユーカリの 1.5 倍で、苗木の量もそれほど多くありません。カリテ (シアバターノキ) やチャンガラ (薪炭材として有用) なども育苗してきましたがうまく育たず、現在は試験地で直播の試験をしています。

一方、肝心の村人たちはどう考えているかという、もちろんユーカリが第一の選択肢ですが、実践者の間でも、葉が飼料になったり、薬用になったりする在来樹を育て始めていることが分かりました。実際に実践者が育苗した在来種の苗木を配布しました。種子を得たり、育てるのが難しいものが多いですが、これからも少しずつ在来種の種類や数を増やしていきたいと思っています。



実践者が育てる在来種

(2) 2021 年新実践者の里山再生

一昨年 (2021 年) に選抜した 5 ヵ村 5 名の新実践者はその年の 12 月に設置した苗畑で、2022 年 2 月頃から苗木の育苗を始めました。雨期前の乾期植栽 (4~5 月)、雨期の植栽を各自の里山で、マリ人スタッフ、先輩実践者の助力を得て行っています。今後は、時々サポートしながら、彼らの手で育苗・植栽を行い、各自の里山再生を進めていきます。



新実践者の苗木づくり



自身で育苗した苗を里山へ植栽

(3) 2022 年新実践者の里山再生

今年度（2022 年）の新実践者の候補者は、乾期の 2 月くらいから開拓していき、近くの先輩実践者にも同行してもらい、彼らの経験や知識を共有してもらいながら乾期植栽（2～5 月）、雨期植栽（5～8 月）を行いました。近年の里山荒廃の危機感からか希望者も増え、最終的に 9 カ村 19 名となりました。彼らの中から、この間きちんと木を管理して育てた 5 カ村 5 名を新実践者として選抜しました。12 月にはこの 5 名のそれぞれの里山に苗畑を設置し、来年の植栽に合わせるよう苗木の準備をしました。



候補者は供与された苗を里山に植栽



新候補者が苗畑を設置

②先達の実践者から新実践者への技術・経験の伝達

(1) 新実践者の作業への助力

2022 年も、新実践者・候補者の育苗や乾期雨期の植栽作業する際に、近くの先輩実践者に同行してもらい、作業を一緒に行いながら彼らの技術や経験を共有してもらいました。隣村ということもあり、共に里山再生を目指す仲間として切磋琢磨していった欲しいと考えています。

先輩実践者が、作業をしながら技術や経験を共有



(2) 新実践者との交流

地域苗畑、実践者がこれまで取り組んできた里山再生の結果は、その年数の違いにより段階的なモデルとして現れ、新実践者にとって、彼らがこれから行っていく里山再生の将来像をイメージさせてくれます。また、交流により技術や知識の交換も行われ、里山再生を行う仲間として将来の緩やかな繋がりを作っていくことも目的の一つとしています。

2022 年は穀物栽培の作業が一息つく 9 月に、一部の新実践者・候補者（4 カ村 6 名）が地域苗畑、実践者との交流を計 2 回行いました。そのうち 1 回は、新実践者の希望もあり、地域苗畑での接ぎ木実習を行いました。



1-01：果樹苗接木の実習《コビリ1 苗畑》

1-02：挿し木用の挿し穂取り《コビリ1 苗畑》

1-03：新実践者のユーカリ林《ジリマジギ村・マトゥ》

1-04：マンゴーの木の下に生えるマンゴー実生を台木にする《コビリ2 苗畑》

1-05：木陰で意見交換《カマブグー村》

1-06：試験地の植生回復を見学《カマブグー試験地》

③学校林の育成

2019 年に植栽を行ったラミニブグー小学校の学校林は、道沿いに列状に植栽して順調に大きく育ったため人目を惹き、自分のところにもぜひ学校林を育成したいと要望が寄せられるようになりました。いっぺんに何校も育成するのは難しいので、年に数校のペースで新規学校林を育成するようにしています。

2022 年度は、小学校 3 校の新規学校林育成を行いました。いずれの学校も学校運営委員会があるため、その保護者達と共に、学校林の植栽と柵の設置を行いました。機関誌でもご紹介



金網で学校林を保護

した通り、ウェレケラ小学校は学校推進センター（CAP）が行う学校林育成コンクールで 1 位を獲得し、保護者達は来年も 1 位をと意欲を燃やしています。

2022 年新規学校林育成

マナコロ小学校	ユーカリ 149 本	カイセドラ 6 本	金網 5 巻供与
ウェレケラ小学校	ユーカリ 400 本	カイセドラ 11 本	金網 5 巻供与
タンバブグー小学校	ユーカリ 200 本	カイセドラ 5 本	金網 5 巻供与

④里山再生の技術開発を行う（試験地）

カソマブグー村での植生回復試験は、10 月で 4 年目に入り、当初草一本生えていなかった裸地に草本が育ち、樹々も育ちました。草本も時とともに草丈が高くなり、土壌や微気象が変化していった様子が分かりました。

2022 年は 3～4 月の乾期に、新規の試験地 C（平地）に柵をしないで、草木枝束や石組みなどを施し、チャンガラ (*Combretum spp.*) の直播がどの様に生長するか見てみることにしました。しかし、雨期の初期にチャンガラや草本が芽吹くと、一部が家畜の食害を受けてしまったのを見かねて、マリ人スタッフたちは柵を施しました。柵の効果を除いたうえでの植生回復工の効果を見たかったのですが、その後のチャンガラの生育が担保され、またスタッフの工夫もあって、他の試験地よりも多くのチャンガラが育っています。



草木枝束や石組みの脇にチャンガラ直播

試験地は、新実践者たちとの交流にも使われ、新実践者たちもとても興味深く試験地の効果を見ていきました。

草木枝束：裸地において、風で飛ばされる砂や有機物、草本や樹木の種子を捕捉するために設置する、草本や木の枝を縛った束。里山で利用されない背の高い草本や薪炭材をとった後に放置される木の枝などを利用する。

表 2 試験地の取り組み

試験地 A	試験地 B	試験地 C
平地裸地	傾斜裸地	平地裸地
2019 年～	2019 年～	2022 年
草木枝束、草本盛土	草木枝束、石組み	草木枝束、石組み
ユーカリ植栽、カリ テ・チャンガラ播種	在来種 3 種寄せ植え	チャンガラ直播、ユー カリ植栽

2) 有用樹の育成

在来種として有用なチャンガラやカリテ（シアバターノキ、*Butyrospermum parkii*.）など、都市への薪炭供給などで疲弊する在来種を自然同様の方法で育成しようと、直播などの試験を行っています。

2022 年は、新たに設置した試験地 C で、前年の石組みの上手で土砂に埋もれた反省にたって、石組みの下手にチャンガラの直播を行いました。その結果、多数のチャンガラの発芽を確認し、その後も順調に生育を続けています。



多く発芽したチャンガラ実生

チャンガラ直播：チャンガラはこの地域で薪炭材として最適とされる在来種。チャンガラのポット苗育苗を試みるが、なかなかうまく生長しない。チャンガラの種子には翼があり、風で飛ばされて移動し、障害物や吹き溜まりで発芽すると予測し、直播を試みたところよく発芽した。



翼のあるチャンガラ種子

⑤日本人の派遣

2022 年は、予定していた日本人 1 人の派遣を、6～8 月（2 ヶ月）に行いました。残念ながら、派遣直後の治安の悪化により、日本人スタッフは首都バマコに留まり、ファナの現場に行くことはできませんでした。ファナでの活動はマリ人スタッフを派遣して継続し、日本人スタッフは、事務所の管理作業を行いました。

表3 2022年活動内容一覧

地域	ファナ			
内容	苗木配布	里山再生実践	学校林	試験地
村名	パフレブグー、ウルフィエナ、カソマブグー、ニヤマトブグー、コロカブグー、ジェバ、バゲブグー、カラモコブグー、バカリブグーa、ボリマブグー、シラニケレンジェ、ラミニブグー、バカリブグーb 16ヵ所 8,630本	実践者：カソマブグー、ニヤマトブグー、タンバブグー、ジェバ、ウェラクラ、グエンドウ、ラジブグー、マナコロ、チチュア 新実践者：カソマブグー、ウルフィエナ、ジリマスギ、アルファブグー、パフレブグー、ボリマブグー、コレカブグー 個々で育苗・植栽した樹木多数	新規学校林： マナコロ小学校 ウェレケラ小学校 タンバブグー小学校 3校 810本 学校林管理： ラミニブグー小学校	カソマブグー 試験地A（平地） 試験地B（傾斜地） 試験地C（平地）
樹種	ユーカリ、バオバブ、カシューナットノキ、スンスン、カイセドラ	ユーカリ、カイセドラ、ズィズィフィス改良種、各種在来種	ユーカリ、カイセドラ	ユーカリ、カイセドラ、在来種、チャンガラ、カリテ



2023 年度現地活動計画（2023 年 1 月～12 月）

里山再生は、単に森林資源を増やし、彼らが利用できる生活物資を得るだけではありません。森林資源から現金収入も得られ、育った木は、地下水を涵養し、劣化した土地を回復させ、土壌を保全します。里山の疲弊が加速している今、住民に生まれた危機感が里山再生の活動を後押ししています。自身で育苗し、植え育て、使うことのできる、地域の核となりうる人材を増やすために、さらなる活動のすそ野を広げていく必要があります。

今年度は、マリ人スタッフを現地に派遣して、里山再生を担う実践者・新実践者たちを育て、点から面へすそ野を広げる現地活動を継続していきます。また、個々の活動を進めていく一方、交流・勉強会などを通じて、横の繋がりを作り、共に里山再生を進める仲間として人的なネットワークを作っていきます。昨年からスタッフの負担を考慮して、活動をファナ地域へ移行してきましたが、今後、当面はファナ地域での活動に専念します。

①里山再生の新実践者への拡大

里山の荒廃は、地域に暮らす人々の生活に直結しており、人々はその危機感からか再生に向けた必要性を口にするようになりました。有用な樹木の苗木を自ら育て、植え育て、利用することは、彼らにとって農業と同じくらい身近なものとなりつつあります。地域に実践者のようなそれを体現してくれる人が多くいれば、周りの人々もそれを手本に、自分も実践したいと広がる機運は高まっています。

苗木配布をしながら、興味のある新たな村人を発掘し、新実践者として迎え、サポートしながら、地域の牽引者として育てていきます。また、育った新実践者のもとで、スタッフや先輩実践者もサポートに加わり、興味のある同村の村人と共に、育苗や植栽方法を学ぶ「勉強会」を開催し、自ら育苗し、植え育て、利用する人たちを増やしていきます。



新実践者の里山への植栽

②先達の実践者から新実践者への技術・経験の伝達



実践者の苗畑を訪問

会で育ててきた実践者はそれぞれ自身で育苗し、個々に里山に植え、その林も大きく育ってきました。その経験と技術は、近くの村の新実践者の取り組みの中で、共に作業をしながら、できる限り伝えてもらいます。

また、先達の実践者や苗畑主たちが新実践者に先んじて育ててきた里山は、これから取り組もうとしている新実践者たちにとってはよい手本となり、技術や知識の交換ができる場として、交流を進めていきます。そして、

里山再生を共に行っていく仲間として、緩やかな地域の人的ネットワークが構築されることを目指していきます。

③学校林の育成

多くの村では学校を維持していくための運営を保護者で組織する学校管理委員会が行っていて、学校林の育成はこの委員会の保護者と協働で行っています。

今年度も、この保護者と共に、ファナ地域の2～3校の小学校へ学校林の育成を行います。新規学校林の育成では、金網などの資材の供与を行い、植えた苗木を家畜からの食害から守ります。また、これまで育成してきた学校林も定期的に訪れ、生育状態などを確認しながら、保護者と共に管理をしています。



保護者と協働して学校林を育成

④里山再生の技術開発を行う（試験地）



有用な在来種の育成を行う

裸地化した里山にどのように植生を回復できるか、草本本束を用いた土砂流出防止や有機物の捕捉などを行ってきました。裸地へ草本の定着も進み、微気象が変化することで、間に植えた樹木の生育も順調に進みました。

今後は、今行っているチャンガラやカリテの他に、里山の多様性を目指して、有用な在来種の育成も試みていきます。果樹の育成には、剪定など改善の余地があると思われるので、実践者の協力を得て、彼らの農園での試験育成も合わせて行います。

⑤日本人の派遣

混乱が続くマリの情勢はこの先大きく好転することは望める状態にありません。日本人を派遣しても現場に行けないので意義が半減しますが、好転した場合に備え、時期を固定せずに1ヵ月×1名の日本人の派遣を予定します。

日本人が派遣できない場合でも、マリ人スタッフを現地に派遣して、活動を継続していきます。

表4 2023年度のスタッフ派遣予定

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1
スタッフ A													

*破線の期間のうち1か月間

ミーティング・総会

<会員総会>

2022 年度の通常総会を書面表決、会場・オンラインのハイブリッドで開催（3/27）
（JICA 地球ひろば、東京・市ヶ谷）

<運営委員会>

JICA-NET のウェブ会議サービスを利用して計 6 回開催

開催日：1/10（第 187 回）、2/13（第 188 回）、5/7（第 189 回）、7/31（第 190 回）、9/23（第 191 回）、12/4（第 192 回）

日本人スタッフ・ボランティアの派遣状況

<2022 年度 派遣実施>

榎本肇（6/12～8/12、約 2 ヶ月間）

<2023 年度 派遣予定>

スタッフ A（時期を設定せず、1 ヶ月）

（11 ページ表 4 「2023 年度のスタッフ派遣予定」参照）

＊マリ派遣に問題ないと判断された場合のみ派遣。

広報

<機関誌「サヘル」他>

第 110 号（7/3 発行）／ ファナ特集号（11/1 発行）／ 第 111 号（12/19 発行）

学校との関係

<お話の出前・資料貸し出し他>

・横浜市立浦島丘中学校「廃品回収収益金委託式」（榎本）（4/13）

イベント

<2022 年 参加イベント>

2022 年度のイベントは、コロナ禍でも感染対策を行い、対面で行う会場とオンラインとの併用で行われました。その中で、以下のイベントに参加することができました。

- ・ グローバルフェスタ JAPAN2022（会場（千代田区）、オンライン参加）（10/1,2）
- ・ ぷらすマルシェ（横浜市瀬谷区）（11/5）
- ・ ジャパン・バードフェスティバル 2022（我孫子市）（11/5,6）
- ・ 第 16 回町田市市民協働フェスティバル「まちカフェ！」（11/26-12/4）
（『協働ガイドブック』掲載で参加）

2023 年は、イベントの開催状況と担当できるスタッフの確保ができれば、可能な限り参加をしていきたいと思います。また、会員の皆さんと交流できるような自主イベントの企画も考えていきたいと思います。皆さんのご協力もよろしくお願いします。

機関誌サヘル 110 号、111 号とファナ特集号を発行しました。久しぶりの日本人スタッフ派遣を受けて、現地スタッフや実践者たちの活動状況をリアルタイムでお伝えすることができました。

◆サヘル 110 号 2022 年 7 月 3 日発行

- ・新実践者のオーディションが進行中 新メンバーはどんな人？ 高津佳史
- ・新実践者紹介① 森林再生に挑むフルベの親子 榎本肇
- ・日本人スタッフのマリ派遣について 榎本肇
- ・フォレスト 21 さがみの森の 25 年間を振り返って 坂場光雄
- ・今年度の会員総会はハイブリッドで開催されました 米倉伸子
- ・会員番号物語（その 18） サヘルの森で見た世界 赤塚秀子

◆ファナ特集号 2022 年 11 月 1 日発行

- ・最近のファナ地域 榎本肇
- ・新実践者と先輩実践者 榎本肇
- ・新実践者 2021、候補者 2022 榎本肇
- ・実践者が育てる在来種図鑑、里山よもやま話 榎本肇

◆サヘル 111 号 2022 年 12 月 19 日発行

- ・地域の環境変化は庭木から 高津佳史
- ・今年度の新実践者決定！！ 榎本肇
- ・2023 年の現地活動 榎本肇
- ・ウレケラ小学校の学校林、コンクールで 1 位受賞！！ 榎本肇
- ・おもしろ在来種 第 5 弾 絞め殺しの木 榎本肇
- ・【アフリカ関連書籍のご紹介】外科医 谷垣雄三物語 高津佳史
- ・国内活動報告：グローバルフェスタ（戸本喜文・榎本肇）、ぷらすマルシェ（森律子）

2023 年も機関誌 2 回、特集号 1 回の年 3 回の発行を目指します。現地レポートと国内活動報告のバランスを保った編集を心がけていきます。

牛乳パック回収

神奈川県横浜市の浦島丘中学校（3 月 3 日）で牛乳パックの回収を行いました。4 月 13 日には、1 年生のみを体育館に入れて資源回収委託式が行われ、牛乳パックとアルミ缶の回収金 12,320 円が当会の活動資金として委託されました。久しぶりの対面での委託式でしたので、生徒の皆さんの顔を見ながら現地のお話をしました。

2023 年も活動にご協力いただける学校や団体があれば、回収に伺います。新型コロナの影響による物流の停滞やウクライナ紛争による輸送費の高騰など、古紙市場を取り巻く環境に改善は見られませんが、山田洋治商店さんのご協力でも続けていきたいと考えています。

ホームページ、ブログ、Facebook の更新作業をメンバーで分担して行うようになって2年目になります。ホームページは事務局担当の榎本、ブログは代表の高津、Facebook は会員の原が担当しましたが、更新回数には課題が残りました。

2023 年はホームページのリニューアルを計画しています。会員の赤塚さんにホームページの改良作業をお願いして、現在進行中です。担当の榎本の他にもアクセスできるようになれば、情報発信が少し増える見込みです。リニューアルを機に、更新頻度を増やして可能な限り情報発信していきたいと思います。

今後も皆様からのご意見やご要望など、お寄せいただければ幸いです。

サヘル定例活動とサヘルキャンプ

<2022 年のサヘル定例活動報告>

サヘル定例活動の目的は、国内での会員交流、技術研修、人材育成などです。自分の目で現場を見て歩き、感じたり、考えたりすることを大切にしています。現在の自然や街並みを楽しみ、歴史・文化の積み重ねなどを学んでいます。4 年目になるコロナ禍の中で、直接に人に会うコミュニケーションの大切さを実感しています。

2022 年は新型コロナウイルス感染者が増減する中で、5 月の亀戸駅から荒川方面、9 月の新座駅から平林寺方面、10 月の中村橋駅からかしわ防災公園方面と 3 回実施しました。そのあと、案内人の体調不良もあり、中止とさせていただきました。

ウィズコロナを目指して、感染症法の位置づけを変えとか、屋外ではマスクをしなくてもよいとかの検討がなされていますが、高齢者や基礎疾患のある人は、まだまだ心配の種が尽きません。

スタッフのいろいろな活動の一部を、スタッフブログで画像をつけて紹介しております。パソコンで「サヘルの森スタッフブログ」を検索してご覧ください。

2022 年度 サヘル定例の場所

5/21 亀戸水神と荒川堤防、9/17 平林寺から清瀬、10/15 杉並区かしわ防災公園
--

<2022 年のサヘルキャンプ>

日本での森づくりの現場を訪ね、諸活動に応用したいと考え、計画しましたが、新型コロナウイルスの第 8 波の増加する中で、人が密となる電車・バスでの移動があり、また、案内人の体調不良のため、中止しました。

<2023 年のサヘル定例活動>

定例活動は、国内での会員交流、技術研修、人材育成などを目的として行っています。新型コロナウイルスとの共存が進められていますが、高齢者、基礎疾患のある人は注意が必要です。密を避け、さまざまな現場を見ながら学んでいきたいと思っています。

期日は、これまで毎月第 3 土曜日に行ってきましたが、土曜日以外にはできないかという声があり、一部を日曜日に行う計画としました。

参加する場合は、メールなどで確認してください。参加費はありませんが、別途施設の入場料金などがかかることがあります。体調に気を付けて、発熱などの場合は、無理に参

加をせず、休養ください。楽に歩ける身支度、飲用水、昼食を持参して、ご参加ください。
なかなか参加できない地域の皆様には、近隣の散歩コース、名所、旧跡などを文章や画像で紹介していただければ、ホームページなどで紹介でき、活動の広がりにつながります。

2023 年のサヘルキャンプは、定例活動に移して、いろいろな施設での体験、見聞をして、現場活動に役立てたいと思います。

2023 年度定例活動計画

期日	場所	集合場所	備考
2023 年 1/21(土)	雑司ヶ谷七福神 【中止】	JR 山手線「目白」駅改札 10:30	池袋駅の南東にある雑司ヶ谷をめぐるります。
2/18(土)	辰巳の森海浜公園と須崎神社	東京メトロ有楽町線「辰巳」駅改札 10:30	東京湾の埋立地の緑地と江戸時代からの神社をめぐるります。
3/18(土)	野崎稲荷と世田谷公園	東急田園都市線「駒沢大学」駅改札 10:30	世田谷の野沢、下馬、池尻あたりを歩きます。
4/16(日)	和光市森林公園と大泉中央公園	東武東上線「和光市」駅改札 10:30	和光市と練馬区の県境のある緑地を歩きます。
5/20(土)	八国山緑地と古戦場	西武新宿線「東村山」駅改札 10:30	北山公園と東京埼玉の県境緑地と久米川古戦場跡などを訪ねます。
6/18(日)	滝山城跡と少林寺	JR 五日市線「東秋留」駅改札 10:30	多摩川の南にある加住丘陵にある都立滝山公園を縦断します。
7/15(土)	日野ふるさと歴史館と黒川清流公園	JR 中央線「日野」駅改札 10:30	日野の歴史を学び、黒川段丘崖線の緑地を歩きます。
8 月	休みです。		
9/16(土)	桐ヶ丘中央公園と旧中山道	JR 京浜東北線「赤羽」駅北改札 10:30	斜面地の緑地と旧中山道をたどります。
10/22(日)	大倉運動公園・砧公園	小田急小田原線「成城学園前」駅改札 10:30	仙川を下り、大地の上の大公園を訪ねます。
11/18(土)	東京臨海広域防災公園と埋立地	りんかい線「国際展示場」駅改札 10:30	防災公園での体験と埋立地の緑地などをめぐるります。
12/17(日)	調布の仙川をさかのぼる	京王線「仙川」駅改札 10:30	武蔵野台地を流下する仙川の源流を探ります。
2024 年 1/20(土)	荏原七福神	JR 京浜東北線「大井町」駅中央改札口 10:30	品川南部の荏原あたりを歩きます。
2/18(日)	和田堀公園と善福寺緑地	京王井の頭線「西永福」改札 10:30	武蔵野台地を蛇行して流れる善福寺川を歩きます。
3/16(土)	片倉城跡公園と小比企丘陵	京王線「京王片倉」駅改札 10:30	八王子の南部にある城跡と丘陵地を歩きます。

定例活動、サヘルキャンプへ参加希望の方は、変更になることもありますので、事前にサヘルの森までご連絡ください。定例活動の緊急連絡は電話をお願いします。

電話：042-721-1601 メール：sahel-no-mori@jca.apc.org 緊急連絡先：090-5754-2813（当日）

地方での会員活動 奈良県（島岡てるみ）

2022 年もコロナで、なかなか一般の人にはアプローチできませんでした。それでも 9 月頃から奈良には修学旅行生が来るようになりました。その頃から時々自宅に知人を招いて、交流がてらサヘルの森の話をしたり、マリのグッズを販売したりしました。

2023 年も同じように 4~5 人位の少人数での集まりを持ちながら、サヘルの森やマリのことを伝えていきたいと思います。

地方での会員活動 千葉県（高津佳史）

我孫子市で開催された「ジャパン・バードフェスティバル 2022」に出展しました。新型コロナの影響で、2 年ぶりのリアル開催となりました。毎年参加していると、鳥の巣を触って喜んでいた小学生が、今は大学で鳥の研究をしている、といったうれしい報告も聞かれました。

2023 年は千葉県内でミニ写真展を開催したいと考えています。上田隆さんが、以前、マリのゴッシ滞在中に撮影した大量の写真から、風景写真を中心に構成したいと考えています。上田さんが暮らしていたゴッシは、今やイスラム過激派の影響で訪れることもできません。かつての美しかったゴッシの村や湖の様子を写真でお見せしたいと思います。



監査報告書

監査の結果、特定非営利活動法人サヘルの森

2022 年度収支報告書(2022 年 1 月 1 日～2022 年 12 月 31 日)

及び貸借対照表(2022 年 1 月 1 日～2022 年 12 月 31 日)は、一般に
公正妥当と認められる会計原則に基づいて、作成されている事を認める。

2023 年 2 月 11 日

特定非営利活動法人サヘルの森

監事 宮代 裕子 

監事 赤塚 秀子 

代 表

高津 佳史

自 営

運営委員

上田 隆

団体職員

榎本 肇

自 営 （事務局長）

工藤 義治

団体職員

久保 隆一郎

会社役員

高津 佳史

自 営

古賀 直樹

会社役員

坂場 光雄

自 営

島岡 てるみ

主婦

戸本 喜文

会社員

監 事

赤塚 秀子

主婦

柴 泰登

会社員

任期は 2023 年 4 月～2025 年 4 月の 2 年間です。

サヘルフォト・アーカイブ（マリの生活編）



2-01



2-02



2-03



2-04



2-05



2-06



2-07



2-08

2-01：熱い湯の中でのシアバターの乳化作業

2-02：ソルガム（雑穀）の収穫後の山積み

2-03：マリの旨味調味料・スンバラ味噌

2-04：バラニテスの実を売る少女たち

2-05：いまだ現役のフランス植民地時代の住居

2-06：丈の長い草で縦ゴザを編む

2-07：セグーの陶器市

2-08：雨期に出回る焼きトウモロコシ



特定非営利活動法人 サヘルの森

〒194-0013 東京都町田市原町田 1-2-3
アーベイン平本 403

TEL: 042-721-1601 FAX は廃止しました
(不在の時は留守番電話に伝言をお願いします)

HP: <http://www.jca.apc.org/sahel-no-mori/>
E-mail: sahel-no-mori@jca.apc.org